

クルーズ船の寄港誘致で 清水港を国際クルーズ拠点に

将来に向けて戦略的な交流を展開することで、国際的な存在感を高め、県民の利益向上を目指す静岡県。今回は、清水港のクルーズ船誘致による国際クルーズ拠点化に向けた取り組みを紹介する。

年間の寄港回数が急増

大型客船によるクルージングが世界的に人気を集めている。静岡県では、清水港客船誘致委員会（民間企業や団体を中心に県・市で組織）の長年にわたる積極的な誘致活動により、また富士山の世界遺産登録、駿河湾の「世界でも美しい湾クラブ」加盟など追い風となり、清水港に寄港するクルーズ船が急増している。その数は2016年が18回であったのに対し、2017年は50回に迫る勢いで、年間を通じて国内外から多くの観光客が訪れている。この傾向は今後も加速することが予想され、同港は2030年頃までに年間175回の寄港を目指している。

クルーズ船の寄港は地域経済の活性化に大いに寄与すること

から、本県では清水港・日の出地区の物流機能を興津地区へ一部移転することにより交流空間の確保を進めるなど、クルーズ船の受入環境を改善することで国際的な交流拠点の創出を目指している。

また本県と静岡市は、J・R清水駅周辺から清水港・江尻・日の出地区の「清水都心WF（ウォーターフロント）地区」と位置付け、平成24年度から本地区の活性化に取り組んでおり、本年3月には、関係者が同地区の将来像を共有・共感し、地域ぐるみで「みなとまちづくり」に取り組む「価値共創」の指針として、「清水都心WF地区開発基本方針」を策定している。

ハード面の整備とソフト面の強化

まず、航行中の全日程で消費される物品が対象になるため、経済的なメリットは大きい。本県は、関係者を対象とした県産品を紹介する食材ツアーを開催するなど、船内消費に向けた取り組みを加速させており、すでに県内企業が年間1トンの食品を船会社へ納入している実績もある。

また、充実した交通ネットワークを活用し、寄港にあわせた県内ツアーを様々な業種と連携して企画することで、清水港周辺のみならず、県全体に経済効果を波及させていく構えだ。

国際クルーズ拠点へ

清水港は、国土交通省から本年1月に「官民連携による国際クルーズ拠点」を形成する港湾に選定され、7月には国際旅客船拠点形成港湾の指定を受けた。連携先である「ゲンティン香港」は、世界最大級のクルーズ船に対応できる旅客施設の整備や清水港の母港化を目指している。2030年には、年間105



寄港時の歓迎イベントは、特産品のPRだけでなく、国際交流の場にもなっている。

「開発基本方針」では、富士山、三保松原、日本平、久能山東照宮など、国際的な観光資源に囲まれた清水の「場の力」を活用して、「みなと」と「まち」が融合する地域を創出し、誰もが心地良く過ごせる「居場所」や、防災とにぎわいが両立する景観づくりを目指している。そして、J・R清水駅周辺を複数のエリアに区分けし、それぞれの魅力を個々に高めながら地域全体の活性化を

回の寄港を実現する予定だ。

また、県内5港の客船誘致組織等と本県で組織する「ふじのくにクルーズ船誘致連絡協議会」を7月に設立し、誘致活動の展開を示した「ふじのくにクルーズ船誘致戦略」を策定するなど、誘致活動は清水港のみならず県全体で進んでいる。

こうした取り組みにより、清水港が東日本における北東アジアクルーズの拠点となり、発着港に発展できれば、富士山静岡空港との連携による「フライ&クルーズ」も現実味を帯びる。清水が横浜や神戸と並ぶ「みなとまち」として認知される日は近い。



ゲンティンクルーズラインのプレジデントKent Zhu氏から川勝知事へ記念品の贈呈。(7/10)

